

図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2018.
April
No.184



新入生にイチ押しの1冊

1 当館所蔵「ちりめん本」種々(2) — いなくなった鉢かづきの姫 —

図書館長 古田 雅憲

2 ブックレビュー

「経済学的思考のセンス お金がない人を助けるには」

「競争と公平感 市場経済の本当のメリット」

「競争社会の歩き方 自分の「強み」を見つけるには」

経済学部 経済学科 教授 山村 英司

「日本人の法意識」法学部 法律学科 講師 中野 万葉子

「夜と霧」国際文化研究科 博士後期課程 佐藤 友梨

「エンタイナーの条件=Conditions of the entertainer」

商学部 経営学科 4年 布住 彩

3-4 世界の図書館

フランス国立図書館

文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授 和田 光昌

モリセツ図書館

国際文化学部 国際文化学科 教授 栗原 詩子

5-6 新図書館施設紹介Ⅱ

ラーニングサポートエリア 図書情報課 小川 ゆきえ

グループ学習室 図書情報課 永津 庸吏

7 蔵書ギャラリー no.24

『パリ・テアトルコレクション』

文学部 外国語学科 フランス語専攻

教授 真下 弘子

当館所蔵「ちりめん本」種々(2) — いなくなった鉢かづきの姫 —

図書館長 古田 雅憲

長谷川武次郎が手がけた「ちりめん本」“The Japanese Fairy Tale Series” (全20冊揃)の第16冊に“The Wonderful Tea Kettle” (分福茶釜)がある*1。茶釜に化けたまま元に戻れなくなった小狸が綱渡りの見世物に出て人気者となり、自分を匿ってくれた古道具屋に恩を返すという昔噺である。“Japanese Fairy Tale”の名に相応しく可愛い笑話だ。奥付に明治29(1896)年6月7日の発行と言う。シリーズ各冊は明治18～25(1885～92)年に順次刊行されているから、この一冊だけが例外的に遅れたことになる。

実はこれにはわけがある—シリーズ完結から三年半後、作品の差し替えが生じたのだ。当初、第16冊は“The Wooden Bowl” (鉢かづき)だった*2。奥付に明治20(1887)年11月22日の発行と言うから時系列も至当である。そう、鉢かづきの姫は登場から八年半後、小狸に主役の座を奪われたのだ。

「鉢かづき」は室町中期に成った物語。享保年間(1716-36)に大阪心斎橋の書林・渋川清右衛門が板行した絵入本「御伽文庫」23編の一つとして広く読み継がれた。今日でもあまきみこさんや長谷川摂子さんの絵本が人気を博している。

その梗概—河内国交野の長者・藤原実高の姫は大きくて不気味な木鉢を被っていた。亡くなる間際の母が長谷観音の夢告を信じ、姫にそれを被せたのだ。ぴったりに付いて外れない。継母はその姿を疎んじ讒訴を重ね、ついに夫婦して姫を邸から追い出してしまう。そこから姫の辛い放浪が始まるが、運よく拾われた山蔭中将邸で下働きするうちに生来の気高さが認められ、末息子の嫁に求められるまでになった。なおも自らの異形を恥じる姫だったが、婚礼直前、鉢がぼろりと落ちて中から様々の宝物が現れる。美貌を取り戻し持参金も得た姫は、嫉妬した兄嫁達の突きつける無理難題を軽々と解いてついに幸せを手に入れたのだとか。

この話を英訳した一編が長谷川弘文社の“The Wooden Bowl”である。表紙に“Told in English by Mrs.T.H.James.”と、また奥付に「編者 英国人ジェイムス夫人」とある—明治9(1876)年に来日し、

御雇外国人として海軍兵学寮で測量術や数学を教えたT.H.Jamesというスコットランド人の、その妻Kateがこれを訳述した。娘たちに昔噺を語る彼女の姿を見たBasil Hall Chamberlainが、日本昔噺の翻訳作業に参加するよう勧めたらしい*3。

Kateは“The Wooden Bowl”の他にもシリーズ10編の英訳を手がけているが、「鉢かづき」の訳述に際しては大きな本文改変を行った—もともと

長くて複雑な話なのだ。紙幅の都合やむを得ない改変だったが、結果的に多くの省筆が生じて本来の筋立てが変わってしまった。有名な「継子いじめ」のくだりも省かれた。

「鉢かづき」は地名人名にまつわる天女伝説や観音利生譚が主題だが、“The Wooden Bowl”は物語固有の名称をいっさい用いない。結果的に「いかにも日本的な神仙観・仏教観」は消え去り、「不運に見舞われた美女が苦難の末に誠実な若者と巡り会い、ついに幸福な結婚を成し遂げる」という「いかにも西欧風の健康な結婚観」を表す話柄として翻案されたのだ*4。もちろん良くできた話だが、それでも“The Wooden Bowl”は後に“The Japanese Fairy Tale Series”から除かれた。

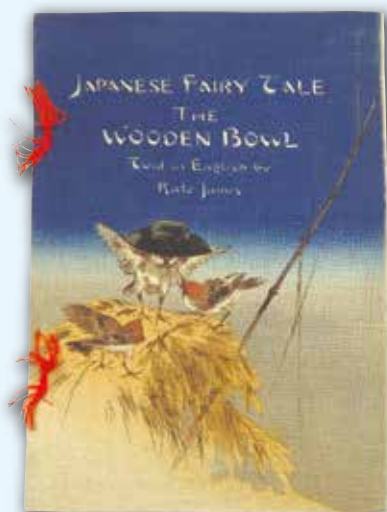
差し替えの理由は未詳だが、気になることはある—同シリーズの刊行は、最初は日本人のための「語学教科書(平紙版)」とその「豪華仕様(ちりめん本)」として長谷川弘文社が企画したものだが、ごく早い時期から英国老舗の児童書専門店Griffith, Faraan & Co.の協力が得られていた。このシリーズはFaraan社と弘文社の「共同出版」だったのだ—となればシリーズ完結後に行われた作品の差し替えも、Faraan社の意向と関わりなく行われたとは思にくい*5。

19世紀の西欧社会はまさに「民話の世紀」の様相を呈し、特に中頃からは世界各地の民話が熱心に蒐集・研究されるようになっていた。その真つ只中に“The Japanese Fairy Tale Series”は現れた。浮世絵風の多色刷り木版画をちりばめた華麗なちりめん本たちは、往時西欧の蒐集家や研究者たちの熱い視線を集めたのだ。が、“Japanese Fairy Tale”の名に惹かれた読者たちの興味や期待の大きさに比して、「いかにも西欧風の健康な結婚観」を表した“The Wooden Bowl”の筋立てが果たしてどれほど応えられただろうか—もしや往時西欧における世界民話蒐集の熱狂はもっと「日本らしい」物語を欲したのではなかったか。さてFaraan社の意向やいかに—。

旧シリーズから除かれて38年目の昭和9(1934)年、“The Wooden Bowl”は“JAPANESE FAIRY TALES. LARGE SIZE EDITION”の一冊として復刊された*6。出版人は西宮興作—つまり長谷川武次郎の息子に代替わりしていた。挿絵もかなり変えられて、特に鈴木華邨の筆に成る表紙は旧シリーズより各段に美しく面白くなった。Kateの訳文も大きく改訂されている。これら新旧二冊を丁寧に対照するなかで、鉢かづきの姫がいなくなったわけも分かってくるのかしれない。

参考文献

- (*)1) Kate James “The Wonderful Tea Kettle” 弘文社、1896(6階貴重書庫 388/1/22-16)
※当館所蔵のものは大正6(1917)年刊の第15版。
- (*)2) 中野幸一／榎本千賀編「ちりめん本影印集成：日本昔噺編」勉誠出版、2014(5階ブックツリー外回り 388/1/116-1～4)に影印が収載されている。
- (*)3) 宮尾與男編「対訳日本昔噺集：明治期の彩色縮刷絵本」彩流社、2009(5階ブックツリー外回り 388/1/100-1～3)の記述による(247頁)。
- (*)4) 上村和也「文字・文学・文化(その五)「鉢かづき」とThe Wooden Bowl(承前)」鹿児島大学文科報告/第2分冊/英語・英文学編(20)、1984(4階電動集書架 930-51)
- (*)5) “The Wooden Bowl”の初期の刷りには、表紙見返しに“Griffith, Faraan & Co. London & Sydney, N.S.W.”の名が確かに掲げられている。なおFaraan社と長谷川弘文社の密接な関係についてはアン・ヘリング「続・縮刷本雑考(1)八、縮刷本の英国版とその意味」日本古書通信 47-9、1982(7階自動書庫 025/8/2-47)を参照されたい。
- (*)6) Kate James “The Wooden Bowl” 長谷川商店、1934(6階貴重書庫 388/1/28)
※18.8×13.4cmのサイズは旧シリーズより一回り大きい。なお同書巻末の目録には“JAPANESE FAIRY TALES. LARGE SIZE EDITION”として他に“Momotaro or Little Peachling” “Three Reflections” “The Flowers of Remembrance and Forgetfulness”が掲げられている。



「The Wooden Bowl」(JAPANESE FAIRY TALES. LARGE SIZE EDITION)」



新入生にイチ押しの1冊



①『経済学的思考のセンス

お金がない人を助けるには』

②『競争と公平感

市場経済の本当のメリット』

③『競争社会の歩き方

自分の「強み」を見つけるには』



大竹文雄著 中公新書

① 2005年(3階 E:ブックツリー外回り 096/331/10B)

② 2010年(3階 E:ブックツリー外回り 096/331/18B)

③ 2017年(3階 E:ブックツリー外回り 096/331/19)

経済学部経済学科 教授

山村 英司

今回紹介するのは、NHKのEテレの「オイコノミア」でコメディアン兼「小説家」の又吉さんと一緒に出演する大竹文雄さんの本です(オイコノミアは2018年3月に最終回となりました)。大竹さんは、番組の中では「経済学」を使って様々な「ネタ(=世の中の現象)」をさばく先生です。今回紹介する3部作の第一弾の『経済学的思考のセンス』を読んだテレビ関係者が、一般向けに経済学を紹介する番組を作りたいと大竹さんを誘ったのが「オイコノミア」を始めたきっかけだそうです。

「経済学」というと難しく、頭が痛くなると感じる人は多いと思います。でも、心配はご無用。3部作の目次をチラッとみると、次のようテーマが示されています。

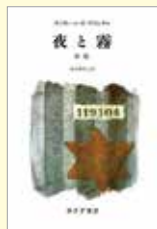
「イイ男は結婚しているのか?」「賞金とプロゴルファーのヤル気」

「競争嫌いの日本人」「公平だと感じるのはどんな時ですか?」

「経済学って役に立つの?」「落語と小説の経済学」

どうでしょう?あなたが考える「経済学」とはかなり違うのではないのでしょうか?身近な話題で疑問に思ったこと、面白そうなこと、これらを考える方法が「経済学」です。そもそも「人間」は何を考えた、何を思って行動しているの?これを探るのが、最先端の経済学です。さあ!気になる人は3部作のどれでもいので手にとってみましょう。いつの間にか、大竹ワールドにはまってしまう「カモ」かもしれません。

『夜と霧』



ヴィクトール・E・フランクル著 池田香代子訳

みすず書房 2002年

(6階 C:通常書架 946/F44/2)

国際文化研究科 博士後期課程

佐藤 友梨

私が『夜と霧』を初めて知った頃、その難解で重い内容に辟易したものです。けれど、最近になって漸く、フランクルの呼び掛けが、これからの時代を生き抜く私たちにとって必要なものではないかと思うようになりました。

原題「心理学者、強制収容所を体験する」が示す通り、心理学者であるフランクルによって強制収容所における様子が綴られています。強制収容所といえばアウシュヴィッツですが、フランクルがそこにいたのは4日間だけでした。2年7カ月間で4つの収容所を体験し、最後はグッハウの強制収容所に移送されます。その中で彼は、残酷な場に囚われた人間がいかなる人間性を見せ、また人間であり続けるのかとう問題に否応なくぶつかっていきます。人間として扱われず、極限の状態に追い込まれ、あつてなく失われていく命の多さ。

そんな中で、フランクルは「生きる意味」に目を向けるように収容者たちに語りかけました。どんな運命に見舞われたとしても、人は運命に翻弄されるだけの存在ではなく、運命に対してどんな態度をとるか決める精神の自由があるのだ、と。

大学生活の中で、悩んだり、不安を抱えたり、いろいろなことがあると思います。そんなときに、希望を灯してくれる本です。やや手に取りにくい本ですが、是非ご覧になってください。

『日本人の法意識』



川島武宜著

岩波書店 1967年

(3階 E:ブックツリー外回り 092/321/3)

法学部 法律学科 講師

中野 万葉子

今回ご紹介する本は、故・川島武宜先生による『日本人の法意識』です。本書の初版は1967年、つまり約半世紀前に書かれた本ですが、現在でも多くの人に読み継がれています。

本書は、まず、西洋近代社会の法体系を明治時代の日本が受容して以来、人々の行動や意識と法との間にどのような「ずれ」が生じてきたかを考察します。日本の法律は、明治維新後に西欧諸国の法律に倣って短期間で作られたため、日本人の生活とかけ離れている部分がありました。次に、タイトルにもなっている「日本人の法意識」について、興味深い話を紹介しながら日本に根付いている法の意識とはどのようなものなのかを考察します。たとえば、所有権については、「外国人が自分のものを人に貸した場合に当然のように「返してくれ」と言うのに対して、日本人はえてして遠慮気味に「返してもらえないか」と尋ねる傾向がある」、また、裁判については、「日本では、訴訟を起こす人はえてして『変わり者』とみなされる」といった話が紹介されます。

筆者は、「ずれ」と「意識」を分析し、どう変化していくかを読み解こうとしています。法律を新しく作っても、それが十分に機能するかどうかは人々の意識と大きく関係します。つまり、法律を作ればすべてが解決するわけではないということです。

本書は、筆者自身が述べているように、専門家のための学術論文ではなく、専門家でない一般読者のためのエッセイです。これから法律を学ぶ法学部の学生さんだけでなく、すべての学生さんにぜひ手に取っていただきたいと思います。

『エンタテイナーの条件

=Conditions of the entertainer』



堂本光一著

日経BP社 2016年

(1階 E,F:ブックツリー内回り(ベストセラーズ) 779/9/14)

商学部 経営学科 4年

布住 彩

この本は、著者である堂本光一さん主演の舞台「Endless SHOCK」を中心としたステージワークや制作に関するエピソードをまとめたエッセイです。芸能界という厳しくも華々しい世界で長く活躍し続けてきた人の経験談なので、非常に特殊な例であるように感じますが、彼の「ものづくり」に対する姿勢や、長年続けている舞台での「座長(リーダー)としての心得」には、一般の大学生である私たちも参考にできる部分が多くあります。

エンタテインメントを成功させるために大切なのは、「まず、とんでもないことでもいいから、頭に浮かんだことを臆せずそのまま掲げてみる。その理想に近づくために、限られた予算と時間と条件下でいかに工夫するかを考え、そのときにできる最善策を模索する。そしてその作業を常に怠らないこと」であると彼は言います。不可能だからと諦めてしまわずに、自分の思い描く理想に限りなく近づくためにどうすればいいか考えるというのは、エンタテインメントに限らず、全ての事柄に共通して重要なことではないでしょうか。

大学生活の中では様々な出会いや経験があります。楽しいばかりではなく、ときには苦手なことに向き合わなければならない場面や、大きな決断を迫られることもあるかもしれません。なにか壁にぶつかったとき、この本が次の一歩を踏み出すための一助になるとと思います。

世界の図書館

〔フランス・カナダ編〕



フランス国立図書館

Quai François-Mauriac, 75706 Paris Cedex 13 France
<http://www.bnf.fr>

フランス

文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授 和田 光昌

「いざ、BNへ!」----フランス国立図書館今昔

毎年夏になると、元BN族の血が騒ぐ。BN族とは、BN、すなわちパリ国立図書館Bibliothèque Nationale de Paris(今のフランス国立図書館BnF)に、留学時代に足しげく通い、日本で職を得てからもそれが忘れられずに、長期休暇になるたびに万難を排してBNに行かなくては研究ができぬとばかりに通いつめる人たちのことを指したわたしの造語である。まだ7月下旬なのに、ああ、あの人はもう行ってる、とか、9月になってこちらは学内業務で休みは実質終わっているのにまだパリで図書館通いしている人がいる、きつとアルスナルだな、などと、今ではさほど熱心なBN族ではなくなってしまったわたしでも、SNSなどを通してやきもきすることしきりである。

目当ての刊本部門は、昔はオペラ座界限、リシュリュー通りにあった。献本制度によりどんな本でもある(はずな)のはもちろん、頼んだ本は席まで届けてくれるし、常連同士で知り合いになれるし、1時間しかない一時外出でも、すしや中華が近くで食べられた。席取りのために毎朝1限のある学生のように早起きして通うと、膨大な本が集積された場の厚みがすこしは自分の身体に浸透し、一人前の研究者になれるような気がしたものである。ペンヤミン

まではわからないが、フーコーの席はあそこだったとか、まことしやかに語られていた。わたしの研究対象の小説家フロベールが読んだ蔵書を自分も借りると、欄外にメモがあって、もしかしてフロベールの書いたものでは、などと感慨にひたったりもした。

そんなBN刊本部門が、パリの外れ13区トルビアックに移転すると決まったのは、ちょうど留学が終わるころだった。1998年に開館した新館は、歴史地区に位置する旧館とは対照的にミニマリズムの極致のような建物だが、実際に行って遠くから見ると、四つの塔(ビル)はバベルの塔のようにも、また、パソコンの入った重い鞆を肩に下げ、すべりやすい階段を転倒に気をつけながら登りつつ見上げると、全体がピラミッドのようにも思われた。広がって席取りの心配は減り(そもそもネットで席を予約できる)、トイレにも一時外出の許可をもらわずに行ける(なおかつそれだけで運動になる)など便利になったが、他方、電子図書館ガリカGallicaの充実により、BNに赴かなければ調べられない本は年々減りつつある。

それでもわたしはBNに行く。なにしろ血が。フランス文学の部屋Vは同業者が多そうで遠慮し、たいがいその隣Wの部屋にいます。関係者のみなさん、もし見かけたらどうぞよろしく。



〔写真1〕フランス国立図書館 新館(トルビアック)外観



〔写真2〕フランス国立図書館 旧館(リシュリュー)内部



〔写真1 モリセット図書館外観〕



モリセット図書館 (オタワ大学)

Morisset Hall 65 University Private Ottawa, ON K1N 6N5 Canada
<https://biblio.uottawa.ca/en/morisset-library>

カナダ

国際文化学部 国際文化学科 教授 栗原 詩子

在外研究のためカナダの首都オタワに1年間滞在しました。同じオンタリオ州でも、州都トロントでは高層ビルの立ち並ぶ現代的な街並みに人口260万人が暮らしているのに比べ、首都オタワのほうは人口80万人前後と小規模で、暮らしている上での感覚は田舎風という言葉がうかぶほど平和です。訪問先のオタワ大学はキャンパスを持たない典型的な都市型大学で、市内中心部の英国風ネオ・ゴシック様式の建物群の

あちこちに、各学部・各学科が雑居しながら教室群を展開していました。大学図書館も専門ごとに雑多でしたが、人文系の資料は、大学のメインの図書館である6階建ての「モリセット図書館」に集められていたので、「映画と聖書」のような横断領域を研究する上でとても助かりました。

この建物の外観は、四方の壁面上部に出っ張りがあります。(写真1)まるで書棚から本を取り出すために、本の背に指を3本かけているような格好だと思ひながら、毎日楽しく通っていました。

カナダはよく知られるように英語と仏語の二言語政策をとっており、図書館内のエレベーターでも、階数がいちいち英仏両言語でアナウンスされます。オタワ市内は英語話者が多いために、この図書館も英語風に「モリセット図書館」と呼ばれることが多いのですが、仏語圏であるケベック州出身の美術史家ジェラルド・モリセ(1898～1970)の名前を冠した建物で



〔写真2 蔵書を積み上げたスノーマン〕

あることをふまえると、「モリセ図書館」と呼ぶほうが適切かもしれません。

カナダでは、資料の「複写」に関する考え方が、日本とはずいぶん異なるように感じられました。それが顕著なのは国立文書館で、閲覧室内にはこんな張り紙があります。「当館には有料のコピーマシンが用意されていますが、史料が傷むのを避けるため、複写希望者にはコピーマシンでなく各自のカメラによる撮

影を大いに勧めます」。日本なら、資料の著作権と図書館の静粛性を守るという2重の配慮から、閲覧室でカメラのシャッターを押すことなど考えにくいですが、カナダ国立文書館では躊躇なく撮影がなされています。これは大学図書館でも同様で、百科事典の項目なり本の一節なりを熟読したいという場合、その場でスマホのボタンを押すことに誰も頓着していません。

司書の方と、この文化的違いについて話してみました。



〔写真3 蔵書を積み上げたクリスマス・ツリー〕

た。すると彼女の意見は「図書館は公共スペースだから、いろんな音がするものでしょ。完全に静かなところで読書したければ、借り出して自分の部屋で読むか、修道院に行くかだわ」というもの。

所蔵本を床に積み上げてスノーマンやクリスマス・ツリーの装飾にしてしまうなど(写真2・3)、運営全般にも旺盛な遊び心が垣間見られる図書館でした。

ラーニングサポートエリア

図書情報課 小川 ゆきえ

図書館2階に、少し開けた空間があります。高校の教室3部屋分ほどのその空間には、8人掛けの丸いテーブルがずらりと並び、3台の電子黒板には、大学での学習方法、その季節にちなんだ情報やメッセージ等が映し出されています。このページでは、この空間「ラーニングサポートエリア」についてご紹介します。



予約なしで ディスカッション

ラーニングサポートエリアでは、友達同士、ディスカッションしながら課題に取り組むことができるエリアです。また、このエリアの席は予約不要ですので、短時間の打合せや話し合いなど、空いている席はどこでもお使いいただけます。毎日午前中から多くの方がこのエリアを利用しています。午後には丸テーブルが満席になることもしばしば。それぞれのグループごとに、活発に意見を交換しながら、勉強しています。例えば、ホワイトボードにグラフを描きながら議論するグループ、電子黒板を使ってプレゼンの確認をするグループ、ゼミ発表の打合せをするグループなど、皆さんこのエリアを上手く使いこなしています。

PC貸出OK！ 学習相談OK！

このエリアの端にカウンターがあります。ここでは、ノートPCやiPadを借りることができます。借りたノートPCやiPadは、図書館内のどこでも利用可能です。またこのカウンターでは、学習に関する相談や、図書館の使い方に関する質問も受け付けています。「この本を探しているのですが、どこにありますか？」「課題が出たのですが資料はどうやって探すの？」「先生に提出するレポート、誰かにチェックしてほしいなあ・・・」などの質問や相談に、ラーニングサポートスタッフのメンバーが応えてくれます。

優しい先輩?! 待機中

ラーニングサポートデスクにいる学生スタッフは「ラーニングサポートスタッフ」として、皆さんを迎えてくれます。サポートスタッフのメンバーは、学部3年生以上～大学院生のスタッフで、図書館利用やレポートの書き方などのスキルを研修等を通じて磨いてきた方々です。ノートPCなどの貸出し手続きはもちろん、先生に質問する前にちょっと先輩に相談できないかな・・・という時にも、気軽に相談に乗ってくれる、心強い存在です。



グループ学習室

図書情報課 永津 庸吏

みなさんは図書館の2階にグループ学習室という部屋があることをご存知ですか？階段で2階まで上がるとすぐ正面に見える、ガラス張りの部屋です。使ったことがない方も、図書館に来たことがあればおそらく「ああ、あの部屋か」とお分かりいただけるのではないのでしょうか。

嬉しいことに開館以来、我々の予想を大きく上回る沢山の方々にご利用いただいております、この一年間で5,000件近くの予約がありました。利用目的は様々でしたが、備え付けの電子黒板や壁面ホワイトボードを活用している姿も多く見受けられ、ほかの皆さんへの刺激にもなっていたのではないのでしょうか。

そのような中、新入生のみなさんや上級生のさらに多くの方に、正しいルールや適切な利用目的に沿ってご利用いただくべく、改めてグループ学習室について簡単にご紹介したいと思います。一度使ってみれば難しいことは全くありませんので、ぜひグループ学習室を活用して大学での学びをより豊かなものにしてください！



グループ学習室はどういった目的のとき使えるのか

図書館のグループ学習室は「複数人で静かに自習するための部屋」ではありません。図書館の資料を使っのゼミ活動や、グループでの議論、発表準備・練習といった目的での利用ー「アクティブラーニング」のために使っていただくことを目的とした施設です。あまり難しく考えていただく必要はなく、「グループ学習室を使う必要性」がある目的であれば問題ないと思っていただいても構いません。ただ、「グループ学習室を使う必要性」がない目的、たとえば「みんなで試験勉強をしたい」といったときは2階のラーニングサポートエリアや、3階の窓側閲覧席をご利用ください。会話をしない場合は4～6階のサイレントゾーンにも、複数人掛けの広い机を用意しています。

<参考>グループ学習室一覧

第1,8グループ学習室	30名収容	電子黒板(80型)備付
第2,3,4,5グループ学習室	15名収容	電子黒板(65型)備付
第6,7,9,10グループ学習室	8名収容	電子黒板無

グループ学習室を利用するには？

グループ学習室は完全予約制です。

図書館HPの「グループ学習室予約システム」から予約をする必要があります。自宅や学内のPCからアクセスの上、予約してください。

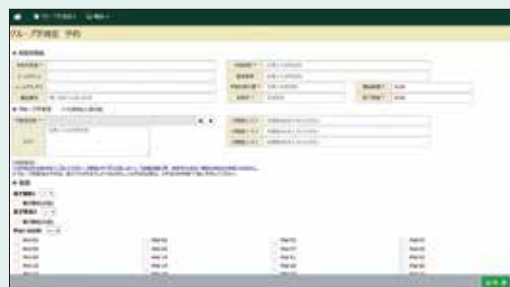
予約手順

- ① 初回のみ、パスワード登録が必要です。
(図1:「ここから」をクリック)
IDに在学番号(頭の「S」は不要)(教職員はSAINSのID)と8桁以上のパスワードを入力の上、登録ボタンをクリックすることで仮登録が完了します。
1時間以内に、学内メールアドレスに届く確認メールにURLが記載されています。
そのURLをクリックすることで本登録が完了します。

図1



- ② グループ学習室と備品(貸出用ノートPC等)、どちらを予約するか選択すると予約画面が開きます。利用目的や人数、日付を入力の上、申請ボタンをクリックしてください。



- ③ 申請すると図書館に通知が届きます。図書館が「承認」をすることで初めて予約完了です！「承認」後、学内メールに通知が届きますので必ず確認してください。利用目的が具体的に記入されていない場合や、適切ではないと判断した場合は利用をお断りしています。その時は「否認」メールに否認となった詳細を記載しています。

【利用上の注意】

- ・予約は1回につき3時間まで。同時に予約できる件数は2件までです。
- ・飲食は蓋付きの飲み物のみ可。弁当やお菓子等在中で食べることはできません。
- ・申請した利用目的に沿った利用をされていない場合、途中で利用をお断りすることがあります。

『パリ-テアトルコレクション』

[6階 R:貴重書庫 772/35/41]

Collection de Paris-théâtre, publication littéraire et artistique contenant les portraits et les biographies des célébrités du Théâtre Contemporain, première année 1873-1874, deuxième année 1874-1875.



【図1】



【図2】

表紙に掲げたのはフランスの写真入り週刊新聞『パリ-テアトル PARIS-THEATRE』の1873年7月3日～10日号の第一面である。第三共和政が成立してまもなくの1873年5月22日から1875年5月19日までに、ゴドモン社から毎週木曜日に刊行された104号分を合冊製本したものが、本学図書館に所蔵されている：『パリ-テアトルコレクション、現代演劇における有名人の肖像と評伝を取めた文芸誌、第1期1873-1874年、第2期1874-1875年』（以下『パリ-テアトル』）。

巻頭を飾るのは、風刺画家で黎明期写真家でもあるエチエンヌ・カルジャが撮影した伝説の女優サラ・ベルナールの肖像で、ページをめくると、見開きの「写真は新聞社に帰属、複製禁止」という但し書きが目飛び込む。その右側にはパリの最新公演情報が、左側にはサラの特集記事が掲載され、フェリックス・ジャイエの筆によって、ジムナズ座における喜劇デビューからコメディ・フランセーズでのラシーヌ悲劇の助演まで、若くしてすでに大器の片鱗を見せつけていた新進女優の数々の舞台が紹介されている。この辛口批評家が「完璧な神の創造物」とまで称えているのが、1872年にオデオン座でヴィクトル・ユーゴーの戯曲『リュイ・ブラス』の女王役を演じたサラで、衣裳に散りばめられた真珠に勝るとも劣らない艶やかな輝きを放つ舞台姿と、バロック的な所作や朗唱法を駆使したその「魅せる」演技に、記者も観客もすっかり魂を奪われてしまった、と絶賛している。

役者の稼業は「見せる」ことで「魅せる」ことにある。サラをはじめ『パリ-テアトル』の紙面に登場するロマン派演劇の名優、フレデリック・ルメートル、ベルト・チボー、ムネ＝シュリといった俗にいう「聖なる怪物」たちは、舞台上はもちろん実人生でも、恋愛沙汰で決闘したり、棺桶で寝たりと、多くの伝説を生みながら「見られる」ものとしての役割を過剰なまでに演じた。購読者の演劇愛好家たちもまた、観客として着飾って劇場へ出かけオペラ・グラスで覗き合い、桟敷があたかも自分

たちの舞台であるかのように互いを見せびらかしては、疑似的に「魅せる」快感を味わっていた。

パリ＝テアトル — 19世紀の大きな特徴である「見せる」文化の勃興が都市をスペクタクルへと変えていく。パリはナポレオンの偉業や共和制の理想を「見せる」ために凱旋門やバスチユ広場の円柱を建造し、新しい技術や機械、異国の品々を「並べて見せる」（＝「エキスポジション」）ために沼地のシャン・ド・マルスを整備して万国博覧会を開催する。マルセル・カルネの映画『天井桟敷の人々』の大道芸でお馴染みの「犯罪大通り」がオスマンによる都市計画で1862年に取り壊されると、ヴァリエテ座やブッフ・パリジャン座などの芝居小屋が軒を列ねるグラン・ブールヴァールと呼ばれる劇場街が、パリの「見せる」活力を吸い上げて一気に祝祭感満載の人気スポットとなった*。

万国博覧会であれ劇場であれ、人々はそこへ行って見てくるだけでなく、見てきたものがどんな風に語られ描かれているのかを、新聞や雑誌が見せてくれることにも喜びを見出した。そしてそれについてもう一度語る。自分が見ただけでは満足できず、それが誰かによって新たに見られ語られ示されてはじめて、あの人もこの人も見たのだという大きな安心感を得たのである。そんな「ブルジョワジーの密かな愉しみ」を近代複製技術によって大量生産する装置、それが『パリ-テアトル』という新聞だった。

図1. フレデリック・ルメートル特集号。写真の台紙に印字された「フォトグリブシー photoglyptie」は、イギリス人のヴァルター・ウッドバリーが1864年に考案した写真製版技術で、重クロム酸カリウムに浸けたゼラチンと鋳型を使って、オリジナルと区別できないほど美しい半濃淡の複製を作成する手法である。こうして他人の肖像を所有するという視覚的愉悅もまた増産されることとなった。

図2. 1850年代以降、輪転機の発達や連載小説の定期購読者の拡大により新聞の値段は下落するが、これに拍車をかけたのが広告収入の増大である。1816年創業の「ムニエ・チョコレート」や20馬力も出るボイラー、音の静かなマシン、ネズミやモグラ退治の薬など、最新お薦めアイテムがずらりと並んでいる。

※参考文献：ジークフリート・クラカウアー著、平井正訳『天国と地獄—ジャック・オッフエンバックと同時代のパリ』ちくま学芸文庫、1995年。第二帝政期を中心に七月王政から第三共和政の19世紀フランスの文化、風俗、政治状況を演劇の視点から描いた名著。（6階 B:通常書架 762/35/43）

編集後記

新図書館が開館して一年が経ちました。あつという間だったような、長かったような。昨年とは新図書館のオープン前後でゆつくり桜を見る余裕もありませんでしたが、今年はしっかりと花見にも行き、春を満喫することができました。最近、春が特に短くなった気がするのには歳を重ねた故か、はたまた気候が変わってきているのか…。この心地良い季節ができるだけ続いて欲しいと願う中の人でした。

(Y.N)

西南学院大学図書館報 No.184

2018(平成30)年4月27日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/>

図書館報バックナンバー(No.153～)も上記サイトに掲載しています。